

リフレッシュ滋賀

第 7 号
連合滋賀・高退協会報
発行責任者: 吉村眞明
編集責任者: 嶋澤順三
大津市松本2-10-6
電話: 077-523-0500

「滋賀県高齢者集会」

九月二二日(水) 午前十時
於 滋賀県労働会館におの浜荘

講演会

講師 津田直次先生

演題

”川の水は流れても
川の底は流れない“

私は大正のはじめに生まれ、以来八十有余年、転変激動の二十世紀を生きてきて、いまその世紀末を迎えています。

世は昏迷の中にあつて、「挫折の時代」「変革の時代」などといわれるとき、過去(特に戦後の五十年)を問い、未来に向かつて思うこと、切なるものがあります。

「川の水は流れても、川の底は流れない」ということばがありますが、そのよ



うなことを
思いつゝ、
私なりの時
世や人生を、
お話させて
いただけれ
ば、と思つ
ております。

津田直次先生

プロフィール

大正五年(一九一六年) 京都府に生まれる

昭和十三年(一九三八年) 京都大学法学部卒

同年 NEC日本電気本社(三田)に入社

同年 兵役のため入営(陸軍経理部)外地を転戦、終戦時陸軍主計大尉

昭和二十一年(一九四六年) 復員

日本電気に入社、以来、新日本電気取締役総務部長、日本電気電子計算機事業部長代理などを経て、昭和四五年(一九七〇年)住商情報システム専務取締役、昭和五

三年(一九七八年) 日本経営データセン

ター社長、昭和五九年(一九八四年)日本コンピュータシステム顧問などを歴任

平成七年(一九九五年) 退任

この間、滋賀県地方労働委員会経営者側委員などを勤められ、滋賀の労働事情に詳しい。

ゼンセン同盟OB友の会滋賀県支部

大河ドラマ『元禄勘乱』ゆかりの地

「吉良・蒲郡」親睦バスツアー

ゼンセン同盟滋賀県支部OB友の会(会員約二、六〇〇名)では、昨年の五〇周年記念親睦ツアーが大好評であったこと、また会員の中から親睦ツアーの要望があつたことから、参加者二三名と当初予定より若干少な目でしたが、平成一年六月一五日、一六日の二泊三日の旅程で、大河ドラマ『元禄勘乱』のゆかりの地「吉良・蒲郡」へのバスツアーを開催しました。バスは八時少し前に出発し、栗東インターから一路目的地に向かって東進した。ゼンセン同盟滋賀県支部を代表して福家支部長から挨拶があり、その後、OB友の会田中支部長からゼンセン現役の全面的なご支援のもとに開催できたことのお礼と、今後のOB友の会活動への協力をお願いを申し述べた。セレモニーが終わった後の車内はすぐに酒場の雰囲気になり、ビール・ワンカップ・一

升瓶、さらには自家製の「鮒ずし」まで用意されてい

て、高速道路の軽い揺れと相俟ってほろ酔い気分の良

いご機嫌で談論風発、懐古談から今

の政治に求める高

齢者対策まで、こ

れがOBばかりの

バスツアーかと思

うほど盛り上がり

た車内となりました。

岡崎に到着してまず「奥殿陣屋」を見学、門前一杯に咲き誇る花菖蒲を観賞した

後「八丁味噌工場」へ。味噌工場では目を見張るような味噌の大樽の見物やコ

ンニャク田楽の試食、八丁味噌の掴み取りやお土産としての味噌樽の直送などな

ど。昼食を済ませて吉良家の菩提寺である「華蔵寺」に参拝した後吉良温泉に直

行し、宿舎である「竜宮ホテル」に到着。暫時休憩してから眼下にひろがる三河湾

から遠く太平洋が望める展望風呂で日頃のストレスを発散したのでした。

二日目は、沿道の紫陽花の大パノラマを観賞しつつ「三ヶ根スカイライン」を

登り、山頂「比島観音」で南方で尊い生命を捧げられた方々の鎮魂碑に参拝しま

した。ガイドさんが歌ってくれた「あ、モンテンパの夜はふけて」を聞き、多

くの参加者があの太平洋戦争のことにそれぞれ

の思いを新たにしました。その後

はグッと現実に近い「癌封じの寺」で軽妙なタ

ッチで話す和尚の講話にナル

ホドと傾き、近くの海産物ショップで

センターでお土産等の買物を楽しみまし

た。昼食は世界の貝殻を集めたという

「ファンタジー館」にある竜宮城を思わせ

る食堂で済ませた後、館内を散策し素晴

らしい貝殻細工の数々を見学し、全員楽

しい旅から帰着しました。今回の旅も、本

当に楽しいツアーとなり、現役みなさん



升瓶、さらには自家製の「鮒ずし」まで用意されてい

て、高速道路の軽い揺れと相俟ってほろ酔い気分の良



自然環境保護特集

「中池見湿地」(福井県敦賀市)の 自然環境をなんとかそのまゝ残したい

嶋澤 順三

トンボの仲間

「中池見湿地」は福井県敦賀市樫曲にあり、その面積は凡そ二十五haです。この湿地には、「根本」(ネキ)と呼ばれる直径二、三m以上に及ぶ杉の巨大な根株が地中深くに多数埋没していることで知られています。推定では縄文時代の中期頃、日本海沿岸の特徴的な植生である芦生杉が、このあたりに群生していたものと思われる。江戸時代、人口増加に伴って新田開墾が行われ、以来水田耕作が続けられて今日に至っています。ところが、

ここは湿原で六十mを越える泥土の堆積層があり、客土なしには水田の耕作は継続できない事情もあって、休耕田がふえて行き、中池見湿地全体の景観は水田と休耕田、ヨシ原などが混り合っており、モザイク状に入り組んだ独特の湿地環境がつけられています。そして、そこには自然と人為が渾然一体となつて織りなす、豊かな自然が存存するのです。

「中池見湿地」は数百程に及ぶ動植物が生息、生育する「生物多様性に富んだ、今日では奇跡的に残された低湿地自然であり、「日本の地形レッドデータブック第一集」(一九九四年)にも、最も緊急な保全を必要とする地形として記載されています。それでは、この「中池見湿地」を棲み家としている愛すべき動植物たちの一部を紹介しましょう。

チヨウの仲間

キアゲハ、モンキアゲハ、アオスジアゲハ、ナミアゲハ、カラスアゲハ、ヤマトシジミ、ツバメシジミ、ムラサキシジミ、ミズイロオナガシジミ、ウラゴマダラシジミ、ウラクロシジミ、ルリタテハ、クロヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲ、ヒヨウモンチヨウ、ウラギンシジミ、テングチヨウ、アサギマダラ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、など。

水生昆虫

(ゲンゴロウ) ゲンゴロウ、クロゲンゴロウ、クロズマメゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウ、コガタゲンゴロウ、オオヒメゲンゴロウ、キベリクロヒメゲンゴロウ、など十一種

湿地植物群

(シダ) ミズニラ、ミズワラビ、デンジソウ、サンショウモ、オオアカウキクサ(その他) ミツガシワ、マツモ、ミズトラノオ、イヌタヌキモ、ヤマトミクリ、ミクリ、エビモ、ヒルムシロ、ヤナギモ、ラオモダカ、ウリカワ、オモダカ、アギナシ、ヤナギスズタ、ミズオオバコ、トチカガミ、シヨウブ、ウキクサ、コウキクサ、ミズアオイ、コナギ、サワオグルマ、カキツバタ、ミズタガラシ、ヌマトラノオ、コバギボウシ、ヤ

ナギヌカボ、ミソハギ、サワヒヨドリ、キセルアザミ、オオニガナ、ガマ、ヒメガマ、マコモ、ヒツジグサ、セイタカタンポポ、など。

この中池見湿地へ大阪ガスKKがLN G(液化天然ガス)の基地を建設することを決定したのは、昭和から平成になつた頃で、主な経緯は次の通りです。

平成四年 六月 敦賀市長誘致表明
〃 十二月 敦賀市議会誘致決議
平成五年 十月 環境調査開始(一年間)
平成七年 十月 環境影響評価準備書提出
平成八年 三月 福井県知事意見

〃 五月 環境影響評価書提出

大阪ガスの事業計画をみますと、LN G基地の敷地面積は、敦賀市の樫曲、泉地区及び金ヶ崎地区の計約一〇haに及ぶ広大なもので、勿論、中池見湿地の大部分が入ります。主要施設は一八万klのLNGタンク一〇基を中心とする日本最大級の規模で、近畿二府四県へ二〇一〇年(平成二二年)頃から都市ガスを供給する予定になっています。

この建設には環境保護の立場からの反対運動が当然のようにおこっています。それは、「中池見湿地トラスト」ゲンゴロウの里基金委員会、中池見フィールドミュージアム実行委員会などの自然保護団体は、中池見湿地の全体をそのまゝ、残し、フィールドミュージアム(野外博物館)として後世に伝えて行こうと、精力的に活動を展開中です。

この活動の一つに「中池見湿地を子ども達の将来に」残すための署名活動があり、これを環境庁長官宛に提出し、国家レベルでの保護へ訴えを上げようとしています。運動の思いはそのとおりであります。運動の思いはすでに移り始めてい

組織紹介

農林水産省滋賀県退職者の会

『全国組織』

農林水産省退職者の会は、一九七五年三月、会員の親睦と生活の安定、向上をめざして諸活動を推進することを目的に結成され、以来今日まで二四年の歴史を積み重ねてきました。

会の組織は、全国に八地区（ブロック）、四七都道府県、三〇九支部組織に、一七、二七三名の会員が結集し、安定した基礎を築きつつ、全国的に高齢者、退職者運動の一翼を担いながら、着実に発展し今日に至っています。

『滋賀県の組織』

滋賀県退職者の会は、一九七五年五月に結成、県内地区（支部）退職者六支部、二三〇名で構成し、会長一名・副会長一名・事務局長一名・幹事六名で運営しています。



〇〇円、地区分担金として一〇、〇〇〇円、その他ほかに、中央会費一、四〇〇円、近畿会費四〇〇円、支部会費（各支部ごとに異なる）を納入しています。

活動としては、年一回の定期総会、必要の都度役員会を開催し、会員相互の親睦を図ると共に、高齢者社会における老後保障の充実、生活の安定を実現するための活動方針を決定し活動してきました。

『今後の活動としては』

- 一、年金や介護、福祉などの政策要求については、全農林をはじめ、連合滋賀高退協、関係団体と協力し、統一行動には積極的に参加していきます。
- 二、高齢者の生活を圧迫する社会保障制度の切下げ、特に年金制度改正についての、学習会を実施します。
- 三、現役組合員と連携を深め、全農林地区分会の運動発展に寄与していきます。
- 四、退職者の会結成の経緯から、農林水産省各機関や全農林との関係を密接に保ちながら、自立した組織運営をめざして、可能な限り現役の負担軽減に努めていきます。
- 五、会の拡大、強化については、退職時の加入対策に重点を置き、農林水産省各機関や地区区分会にも協力を要請していきます。また、未加入者には粘り強く加入を呼びかけていきます。

高退協カレンダー

一九九九年

二月一五日

連合滋賀・高退協第五回総会
勤労福祉会館「つがやま荘」にて開催しました。

三月七日

年金改悪反対署名活動

高退協及び現役組織を通じて一月から二月末まで署名活動を実施しました。また、三月七日には、平和堂石山店前で高退協による街頭署名活動を行いました。みなさんのご協力により、約六〇五〇名余りの貴重な署名が得られました。この署名は、三月二三日に川端衆議院議員を紹介議員として提出しました。

八月二七日

近畿ブロック高退連総会

& 高齢者近畿集会

第一部 連合近畿ブロック

高退連第六回総会

第二部 国際高齢者年近畿集会

シンポジウム

九月一五日

九九全国高齢者集会

東京都体育館にて開催されます

九月二二日

九九年滋賀県高齢者集会

一面の記事の通り開催されます。多数の参加をお待ちしています。

編集後記

今回は自然環境保護をテーマに取り上げてみました。近年、官民を問わず開発の名のもとに自然環境破壊の進行は止まるところを知らず、またその内容たるや納得の行かないものが多く、自然に対する人間のおごりに他ならないと思います。みどり豊かな地球を後世に伝えるためには、身の回りの草木一本、小さな虫一匹にも大切な命を感じずるとともに、自然破壊に目を光らせ、またその保護に一人ひとりが自分の意志表示をし、参加していくことが大切だと考えます。

今年も滋賀県高齢者集会がご案内のように、九月二十二日に行われます。今年も国際高齢者年であり、人生の大先輩である津田直次先生にご講演をお願いしました。多数ご参加下さい。

投稿歓迎！

会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。原稿は左記までご送付ください。

〒520-0807 大津市松本2丁目10-16

連合福祉会館内

連合滋賀・高退協事務局

る生態系を即座に打つ手立てもない現状において、大阪ガスの環境アセスでは、建設にあたり県との協議の中で三・三ha（全体では約一〇ha）ほどに拡大し「環境保全エリア」を造成して貴重な動植物を県中のこのエリアへ移植、移入して守って行こうという取り組みに着手しています。その内容は、営農作業に準じた維持管理を継続的に行い、動植物の生育・生息環境を維持すると共に、分布量の少ない群落、種については補完的に移植を行い多様性を確保したり、動植物にとつてより良い環境にするために、池や水路などの基盤整備等をするを基本に考え、これまで行われてきた農業の営み（農村生態系）を維持することによつて、中池見の自然環境を保全していこうと努力しています。今後ガス基地の建設が進んで行くものと予想されますが、利便性を求めてきた人間社会と自然の共有は、この土地に限らず国内の様々な地域において、また、諸外国を含めた地球規模において、今後もまだまだ続く問題であり、環境保全に向けてみなさんと考え、真のホモサピエンスを地球に生きていく一員として、組織を構成する組合として、深く追求しながらの様な対処策で望むのか考えていくことを提起したい。そんな思いで中池見湿地が将来通じてすばらしい自然を残していくよう見守っていただくではありませんか。

朝日新聞社森林文化協会は、七月四日、滋賀県朽木村で「二十一世紀、森（自然）とどう向きあうのか」をテーマに、森林文化シンポジウムを開催しました。このシンポジウムで、東大名誉教授、筒井迪夫氏（七三歳）、作家、井出孫六氏（六七歳）、衆議院議員、武村正義氏（六四歳）、

大阪市大名誉教授、吉良竜夫氏（七九歳）、シンガーソングライター、しらいみちよ氏（三九歳）の五名から発言がありました。

「地球環境が危機にひんしている。森と川と人が一体となる組織をつくり、二十一世紀の担い手となる若い人の教育が大事である」（筒井氏）、「六割を超えるドイツ人は毎週日曜日に森を訪れるのに、日本人では一割にも満たない。都会の人は自然の中に遊びに行くという習慣が断ち切られている」（井出氏）、「二十一世紀は経済至上主義から環境主義へ変わるべきだ。日本は環境問題、具体的には植林などで国際貢献すべきである。」（武村氏）、「自然生態系は複雑なシステムだが、多様な役割を果たしている。地域や地球の環境を守り、生物の多様性を守るには、本来の生態系をできるだけ残して行かなければならない」（吉良氏）、「屋久島で海ガメの赤ちゃんのふ化を見たが、大気汚染でマツが枯れ、車の光を月の光と間違えて道路へ向かい、海ガメが車にひかれてしまうことが多いらしい。」（しらい氏）

いま、日本ではトキの赤ちゃん一羽を大事に育てていますが、かつて日本の空は、全国どこでも、トキやコウノトリ、タシロウツルの飛翔がみられた筈です。絶滅寸前になってあわてて対策を講じても、手おくれになることが多いのです。一旦破壊された自然や環境を元に戻すには、天文学的な費用と長い歳月が必要であり、それを思うと、いとも安易に自然や環境を破壊している現状はおそろしくもあり、腹立たしくもあります。このような現状にストップをかけるには、自然環境破壊の罪をひじょうに重いものにする必要があります。たとえば、小学校で飼われて

いるウサギを皆殺しにするような事件があつたと断言できませんが、たとえば見つかつても、それで懲役刑になるようなことはないといい処罰の在り方が大問題だと思えます。そもそも人命だけを特別扱いするという考え方に根本的な誤りがあるように思えます。少なくとも、自然環境を損ねた場合、一生かかかつてその回復を求めるといった量刑が、これからはふさわしいのではないのでしょうか。動植物は抗議の術を知らないのですから、人間が代わって抗議の主張をするところにこそ、

人間の叡智が存在すると思うのです。（追記）滋賀県から福井県敦賀市は近隣の土地であり、短時間で訪れることができます。是非近いうちに行つて、「中池見湿地」をみてきて下さい。一人でも多くの人が現地に訪れ、各地で失われた自然環境に触れて、その大切さを認識していただくことが、いまにより大切ではないかと思っています。

ナカイケミヒメテントウ

—中池見湿地から発見された特産の新種—

「中池見湿地」が、1996年3月、東京の日本生態学会総会でその保護・保全に関する要望書が採択されたのと時をほぼ同じくして、山口市における日本昆虫学会で、湿地に特異的で、中池見に固有と推定される小さい美しいテントウムシの未記録種が発表されました。正式な学術上の新種記載は印刷公刊によって確立いたしますが、ここではこの新種をナカイケミヒメテントウという和名で紹介することにしましょう。

このこれまで未知のヒメテントウの一種は、1994年、岸本 修により、中池見湿地で採集され、福井大学の佐々治寛之との共同研究の結果、中池見湿地に固有な新種であることが判明したものです。勇ましいクワガタや華麗なチョウを王侯貴族とするならば、ナカイケミヒメテントウは正に素朴な田園から生まれてきた中池見のお姫さま、カグヤヒメテントウ、オトヒメテントウなどと並んで昆虫目録に登録されることになります。

体は黄褐色、体長はわずか 2 mm とずいぶん小さく、体の中央に三角形の黒斑があるのが特徴です。おそらく湿原内のヨシなどのイネ科植物の枯れた茎のなかで成虫越冬している可能性があるが、その詳しい生態や生活史も併せて今回明らかにすることが出来ました。

中池見湿地が、大阪ガスの LNG 備蓄基地と化して消滅することになれば、新種命名されてからわずか数年で、この微小な昆虫の種は、この地球上からその姿を永遠に消してしまうことになるのです。正に、悲劇の昆虫と言わなければなりません。今後、さらに中池見湿地を精査すれば、こうした未知種が数多く発見される可能性が高く、中池見湿地は、正に学術的にもこうした可能性を秘めたきわめて貴重な場所なのです。

